

中古

昨年暮れに刊行された河添房江『源氏物語時空論』（東京大学出版会）の第一部は『源氏物語』と東アジア交易圏、第二部は「メディアとしての唐物」と題され、著者がその方面で考察を重ねてきた論が集成されている。平安朝物語に登場する「唐物」については、すでに伊井春樹等による論考もあるが、河添はそれをふまえつつ、より多様なかたちで物語の深層にせまろうとする。若い研究者による類似的視点からの考察も多いが、その中で、末沢明子『源氏物語』のガラス―宿木巻の藤花宴を手がかりに』（上智大学『国文学論集』39 1月）は、「唐物とその所持者の間には何かしら不調和があることが少なくない」のに対し、ガラスすなわち「瑠璃」には「少しの翳りもない」ことを指摘する。同じ「唐物」にも、さまざまな性格のものがあった。「瑠璃」が仏教語であることも視野に入れた、更なる展開を望みたい。「東アジア」という視野の中で日本文学を見直そうという試みは多いが、高兵

兵「菅原道真詩文における『残菊』をめぐって―日中比較の視角から」（『国際日本文学研究センター紀要『日本研究』32 3月）は、中国と日本で「残菊」の語がまったく違った意味に用いられていることを問題にする。「残」の字が日中両国で異なった意味に使われているという指摘はこれまでにもあったが、高兵は、多くの用例の検討を通して通説とは異なった結論を導き、平安時代の日本の詩人が「中国の詩に見られない新たな展開」を示していることを指摘する。漢詩という「唐物」の受容について考察した、興味深い論考である。

滝川幸司「藤原基経と詩人たち」（『語文』大阪大学国語国文学会・84 85 2月）は、藤原拱関家の基経がしばしば自邸に詩人たちを招き作詩の会を催していた事実を指摘し、後に道長などが行った同様の催しの先蹤と位置づける。菅原道真をはじめ多くの詩人たちがそこに参集したこの意味は小さくない。また、仁木夏実「藤原頼長自邸講書考」（『同』）は、

藤原頼長が定期的に自邸でおこなった漢籍の講書、すなわち学習会について再検討し、通説を否定しつつ、当時流行の「影供」すなわち画像を掲げて行われたさまざまな儀式との関わりを探っている。時代は大きく異なるが、どちらも、平安貴族社会における漢詩創作や漢籍享受の「場」と拱関家との関わりについて具体的に考察した論として注目される。

陳斐寧「『大殿』としての光源氏―執政者への方法をめぐって―」（『国文学研究ノート』40 1月）は、「大臣（おとど）」とは異なった「大殿（おほとの）」という呼称の意味を古記録の実例を通して再検討し、その語が絵合巻以後の光源氏の呼称として用いられていることの意味を探っている。結論の当否については今後の論議を待ちたいが、その時代の現実社会における権力構造の実態を考えながら語義を把握し、それによって物語の虚構世界の意味を考えようとする姿勢は評価できる。

小島明子「女院文化圏と『我身にたどる姫君』―前齋宮の問題を中心に―」（『国語国文』17年12月）、勝亦志織「『いはでしのぶ』の一品宮―皇女から女院へ―」（『学習院大学国語国文学会誌』49 3月）は、対象とする作品も方法も異なるが、どちらも「女院」が豊かな経済力

や権力を持つようになった院政期という時代を視野に入れて物語を読みとらうとする。その点、さきの陳論文に共通するところもあるが、『源氏物語』の時代から大きく変貌した院政期以降の社会背景を考へることによって、いわゆる中世王朝物語の世界の独自の意味を探らうとする試みとして興味深い。個々の論旨にはなお議論が必要だが、この方面の研究の今後一層の展開に期待したい。

片桐洋一「『枕草子』の基盤は和歌」(『百舌鳥国文』17 3月)は、幅広い業績を持つ筆者の、はじめての『枕草子』論。和歌を基盤とした作品として『枕草子』を読もうとする姿勢や、『枕草子』の「見えないところを復原するための最も有効な鍵は、和歌の知識だと言つてよい」という結論は正統かつ明快である。『枕草子』研究の現状に「石を投じる論」として、今後重く受け止められるべきであらう。

竹下豊「冷泉家時雨亭文庫蔵第四類本『人丸集』について」『万葉集』次点本としての『人麿集』(同)は、冷泉家時雨亭叢書の解題で筆者が示した見通しの詳論。『万葉集』巻十一の歌を原歌とするとみなされる歌が大量に、『万葉集』の歌順どおりに収められている第四類本『人丸集』を、『万葉集』次点本と

して位置づけようとする手堅い内容だが、『人麿集』など一群の私家集の成立を考へるためにも、平安時代における『万葉集』享受の実態や平安時代文学との関わりを考へるためにも、今後重要な意味を持つことが予想される論である。

前回の時評で、「仮名表記と一体になって成立し展開した」平安和歌草創期についての論を待望したが、木下長宏「和歌のイコノグラフィ—もう一つの韻律」(『國文學』18年8月)は、仮名表記すなわち書と和歌を一体のものとして考へようとする刺激的な論。石川九楊の発言をふまえ、「高野切」などに見える歌意を無視した改行などの表記を、「隠すこと」によって仄めかす「意図的な手法と位置づけ、それが「当代の人びとの世界観の方法」[平安時代後期を生きる知識人の表出の原型]であつたとする。論はさらに、絵巻や障子絵における異時同図法の「連綿」とした構成や平等院鳳凰堂の荘厳法にまで及ぶが、『古今和歌集』は、『万葉集』と並んで「やまとうた」のもう一方の起源であるが、それは「書かれた姿」においての起源だつた」という木下の結論は重要である。木下はまた最後に定家の書について、『古今和歌集』の連綿体を別の方向へ連れ出そうと見ているのが見える」と述べているが、

その定家様の書をめぐって、18年7月にキャンパスブラザ京都で公開シンポジウム「定家様と擬定家—擬定家本私家集の出現をめぐって—」(主催・京都産業大学日本文化研究所)が行われ、興味深い意見が交わされて盛り上がった。

享受史・注釈史の研究では、昨年のものだが吉森佳奈子「『仙源抄』の位置」(武蔵野書院『源氏物語とその享受』研究と資料」17年10月)が注目される。「仙源抄」については従来、自跋とされる跋文の記述によって、『水原抄』「紫明抄」(原中最秘抄)の説に「愚案」を加えて作られたものとされてきたが、吉森は個々の注記の検討によってその想定に疑問を呈し、むしろ『河海抄』と共通する要素が多いことを指摘して、改めて『仙源抄』の注記の性格を考えている。

『伊勢物語』享受史のうえで大きな意味を持つ『嵯峨本』については、17年11月の日本近世文学学会大会(於奈良女子大学)で鈴木広光による『嵯峨本』『伊勢物語』の活字と組版」という興味深い発表が行われたが、それに続いて、「私立大学図書館協会西地区部会 阪神地区協議会 書誌学研究会」による労作『嵯峨本』『伊勢物語』(第一種本)の考察と検証(3月)が刊行された。従来の通説を越える画期的な研究の進展を喜びたい。